

【ねがいはましては】

令和2年3月25日
第353号

KYOWA SCHOOL

「なかないつばめ」

1月2日、久しぶりに「相田みつを美術館」へ行ってきました。教え子さんたち2人との3人珍道中です。訪れるたび、美術館の展示はテーマが変わっており、新鮮味があります。その中で出会った詩・「ひとりぼっちのつばめ」・。

相田みつを『ひとりぼっちのつばめ』

「ひとりぼっちのつばめ」

十一月六日の朝 街の中の電線にわたしは、一羽のつばめを発見しました。
陽は高く昇りながら 空気の冷たい朝でした。

つばめだとわかったのは 椋鳥(ムクドリ)の群れがきてそれを追い払ったときです。
ひえびえとした空気の中を 飛び立った姿は まちがいなくつばめでした。

夏の頃の敏捷さはなく 気のせいかなんとか弱々しい飛び方でしたが
椋鳥に追われて 空の彼方に飛んでゆきました。

仲間の群れから外れて 南へ帰りそびれたつばめでしょう。
ここは間もなく 冷たいカラッ風が吹くから つばめの冬越しはできません。

海を渡って仲間のところへ 飛んでゆく力がないならば、少しでもあったかい 南の方へ飛んでゆくがいい。
あったかいところで、来春、仲間がくるのを じっと待つがいい

椋鳥よ、多勢を頼んで ひとりぼっちの つばめをいじめないでくれ

ひとりぼっちのつばめは お前達にいじめられても 声も出さずに逃げたじゃないか
「お父さん!!お母さん!!」と、声を出しても 飛んできてくれる 親がいらないからです。

どんなにいじめられても どんなにつらくても 親のない子は 声を出して泣かないそうです。
声を出せないのじゃない 出しても空しいからです。
どんなに泣き叫んでも だれもきてはくれないからです。
声を出して泣ける子はしあわせなんです。

椋鳥達に追われた ひとりぼっちのつばめは 泣き声も出さずに 冷たい空の彼方へ飛んでゆきました。
声は出さないけれど つばめは泣いていたのです。

声を出さずに 小さなからだをふるわせながら 泣いて行ったのです。

この詩の中の一行に、私のこころは釘付けになりました。

『どんなにいじめられても どんなにつらくても 親のない子は 声を出して泣かないそうです。』

勉強ができない、成績が上がらない、度重なる親からの叱責……。

「わたしには、もう誰も手をさしのべてくれない……私の味方になってくれる人はいない……。」

かたちではひとつの家に暮らしているようであっても、実際にはこのつばめのようにひとりぼっちの子がたくさんいるような気がいたします。なんとか親に認めてもらいたい、その一心で真面目に取り組む子もいます。そのような子は、勉強が楽しくて向かっているのではありません。ただ、ひとりぼっちがさみしいのです。親に認めてもらいたい。親にこちらを向いてもらいたい。ひとりぼっちのつばめは、『こころで』親に添いたいのです。

学校へ行けば、まわりはムクドリたちでいっぱいです。家へ帰ってきててもひとりぼっち、学校でもひとりぼっち……。

学校は現実です。会社も現実です。現実と向き合わなければ生きていけない社会が、今の社会です。では、ほっとできる場所はどこなのでしょう。最も相応しいところは、家族だと思います。どんなにひとりぼっちになっても、家に帰ってくればほっとする。どんなに他人から非難される行為をしたとしても、そのわけをしっかりと聞き止めてくれる。そんな場所が家族です。学校からのテスト結果を持ってきて見せてくれる。その行為そのものがご両親をこころから受け入れてくれていることとなります。見せてくれただけでこころからお子さんに感謝の意を示してあげなければならないのかもしれないかもしれません。

「0点とちゃった」といって見せてくれたとき、「ありがとう」って言ってあげられるような関係が、ひとりぼっちのつばめをつくりださない大切な行動だと思います。

さて、これをお読みいただいているお母さま、お父さま……お子さんが声を出して泣かないとき、はたしてどちらのお子さんでしょうか。……泣いていいんだよといって、お子さんを抱きしめてあげてください。